

主な外部表彰

2024年度 表彰の紹介

「ヴァラナシ国際協力・コンベンションセンター」が JAPAN コンストラクション国際賞を受賞

当社が施工した「ヴァラナシ国際協力・コンベンションセンター」（設計：株式会社オリエンタルコンサルタンツグローバル、株式会社日建設計）が、国土交通省主催の第7回「JAPAN コンストラクション国際賞（国土交通大臣表彰）」を受賞しました。本施設は、国際会議、政府会合、文化行事などに対応し、知的交流・人材交流の拠点として、ヴァラナシ市の文化・歴史的重要性をPRする目的で建設されました。本賞では、質の高いインフラを実現したことが評価され、建設プロジェクト部門で受賞しました。



ヴァラナシ国際協力・コンベンションセンター
(インド共和国・2021年3月竣工)

「中部国際医療センター」が医療福祉建築賞 2024 を受賞

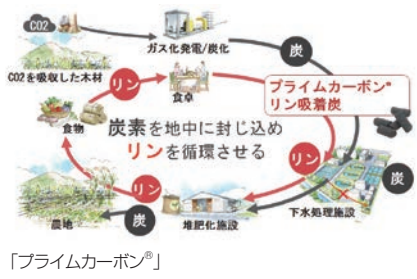
フジタ・TSUCHIYA 特定建設工事共同企業体が施工した「中部国際医療センター」（設計：株式会社久米設計）が、一般社団法人日本医療福祉協会主催の「医療福祉建築賞 2024」を受賞しました。本賞は竣工後3年以内の医療福祉施設を対象に、デザインだけでなく利用者の快適性や、スタッフの使い勝手といった視点もあわせて総合的に評価し、優秀と認められた施設を表彰するものです。本施設は502床を備える総合病院で、地域とのつながりを意識した設計や、利用者や地域住民にとっての居場所の重要性が評価されました。



中部国際医療センター
(岐阜県美濃加茂市・2021年9月竣工)

「プライムカーボン®」が日本炭化学会研究発表会にて技術賞を受賞

当社の独自技術「プライムカーボン®」に関する発表「堆肥形状とリン含有バイオ炭の有無が堆肥の肥効に及ぼす影響」が、東北大学で開催された第22回日本炭化学会研究発表会にて技術賞を受賞しました。「プライムカーボン®」は、再生可能エネルギーの創出や下水処理施設からのリン資源の回収など、多様な分野にまたがる総合的な取り組みです。この「プライムカーボン®」を加工した「プライム堆肥®」は、牛糞や発電副生炭といった副産物から生まれる自然な肥料で、本発表ではペレット化された「プライム堆肥®」の高い肥効について報告し、その成果が学術的にも認められました。



「プライムカーボン®」

その他の受賞

受賞名	表彰対象
一般財団法人ヒートポンプ・蓄熱センター「令和6年度デマンドサイドマネジメント表彰」優秀賞	大和ハウスグループ みらい価値共創センター (奈良県奈良市)
「厚生労働省労働基準局長表彰」 「群馬労働局長表彰」	株式会社SUBARU 仮称第2群馬部品物流センター 建屋能増工事(群馬県太田市)

受賞名	表彰対象
公益社団法人日本パリュウ・エンジニアリング協会 2024年度協会顕彰 VE経営者賞	代表取締役専務執行役員 安全本部長 平野 徹
令和6年度 中央職業能力開発協会会長表彰	技術センター 建築研究部 添田 智美 広島支店 建築技術統括部 技術部 若林真一

第三者意見

河口 眞理子

立教大学特任教授、相模屋食料株式会社CEOアドバイザー

一橋大学大学院修士課程修了(環境経済専攻) 2020年3月まで大和総研にて、サステナビリティの諸課題について、企業の立場(CSR)、投資家の立場(ESG投資)、生活者の立場(エシカル消費)の分野で20年以上調査研究、提言活動を行ってきた。現職では、サステナビリティ学についての教育と、エシカル消費、食品会社のエシカル経営に関わる。国連グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン、日本サステナブル投資フォーラム、WWFジャパンなどのNGO団体の役員も多数務める。著書は「ソーシャルファイナンスの教科書」、「SDGsで「変わる経済」と「新たな暮らし」」(ともに生産性出版刊行)ほか。



「“高”環境」レポートに第三者意見を述べさせていただくのは、今回が3回目になります。

初年度に指摘させていただいた生物多様性の取り組みについて、昨年度の報告書では、生物多様性保全の取り組みとして、ネイチャーポジティブ定量評価手法やICTを活用した生態系サービスモニタリング手法の活用、グリーンインフラ技術開発および自社や顧客のOECM登録支援など、国の『生物多様性国家戦略』にそった取り組みが多く報告されました。さすが企業理念を「自然」から始める企業ならではの対応です。今年度はTNFD開示にむけたスコーピングの実施や、自然共生に特化した部署を設置するなど、活動の進化が伺えます。中でも土地利用改変による生物多様性への影響を定量評価するツールの開発は、今後の生物多様性保全活動を加速化させることと期待します。

目標に対する2024年度の進捗では、在来植栽実施率は目標12%に対して56%、森林破壊リスクのあるCランク木材の使用比率は、目標2%以下に対して1.9%(前年比4.9ポイント減)と着実に成果を出されているのも頼もしいです。さらに、技術センターにおける自然共生型の緑地管理手法の検証は、ビジネスに直結する取り組みとお見受けします。しかし、2030年までにネイチャーポジティブに転換させるためには、より高い目標設定と活動の加速化を期待します。

気候変動に関しては、施工におけるCO₂削減管理システム導入が功を奏し、CO₂排出量を大幅に削減できたことは評価できます。削減量の可視化により現場の意識改革が促進されたことも活動推進へのエンジンになると期待します。今回特筆すべきは、トップメッセージでも紹介された、独自開発の木とコンクリートを組み合わせたFWdPC®構法です。木材はCO₂の固定機能だけでなく、建物内の調湿効果も期待されますし、木材に囲まれた居住空間は安

第三者意見を受けて

今年も貴重なご意見や課題提起を賜り、また取り組みの方向性を後押ししていただき、御礼を申し上げます。

一昨年、初めて河口様にご意見を頂戴して以来、生物多様性テーマの陣容を大きく見直しました。2025年度はフジタGX戦略において自然共生に焦点を当て、中長期的な生物多様性に関する目標および施策の検討を進めていきます。

本レポートでご紹介した各種取り組みが進展した背景としては、経営層をメンバーに含む委員会を設置したことにより、戦略から運用

らぎをもたらします。使用木材は森林破壊リスクフリーと考えられますが、国産材であれば、日本の生物多様性保全に資する森林経営を後押しする、ウィンウィンの構法と考えます。同様にウィンウィンといえば、歩道用舗装材のバイオ炭インターロッキングブロックもバイオマス発電の副産物を利用することでサーキュラーエコノミーに貢献し、同時に脱炭素にも資する技術です。大量の資材を使う建設業でこれらの技術が早くデファクトになることを期待します。

以上の環境の取り組みは順調に進捗しているように思います。一方「人の問題」は建設業にとり環境以上に喫緊の経営課題であることは、トップメッセージからもうかがえます。「担い手」の確保は日本全体で深刻な問題ですが、特に猛暑や豪雨などの悪天候にも悩まされる建設業に優秀な人財を集めることは大変なご苦労があると推測されます。それを反映しているのか、人事関連データの開示は上場企業以上に詳細に開示されています。

また従業員エンゲージメントや建築系・土木系の女性従業員を対象としたダイバーシティの取り組みにも真実度を感じられます。さらに、社長が強調される建設ビジネスモデルの転換＝オフサイト建設への移行は、建築技術およびイノベーションに基づく取り組みであり、生産性向上に資するだけでなく、働きやすい職場の提供という点からも人財対策としても注目されます。

災害や事故が多発する現在、協力会社を含めた現場で作業に携わる人たちの安全を担保する仕組みを徹底させることは、企業理念の体现そのものです。今回の特集、能登半島復興活動は頻発する異常気象の中で、頼もしく思いました。本当のイノベーションとはハードの技術開発にとどまりません。「まぶたの家族運動」のような一人ひとりの心に訴えるソフトがあってこそ、その力を発揮します。ハードとソフトのイノベーションを積み上げつつ「自然を、社会を、街を、人の心を」豊かにするお仕事にまい進されることを期待しています。

まで連動する組織体制を整備したこと、技術センター付属棟建設によって実践的な機会を得たことが主な要因ととらえています。

シナリオ分析で抽出した重要課題「脱炭素」「災害・防災」「自然資本」「労働・健康」の本質的な解決には、諸課題の関連性や相互への影響を広くとらえることが重要と考えています。それが大和ハウスグループの「将来の夢」(パーパス)実現につながると強く認識し、今後も企業理念を軸として取り組みを加速してまいります。

取締役専務執行役員 管理本部長 前原充亮